三重県埋蔵文化財調査報告 19

近 畿 自 動 車 道

埋蔵文化財調査報告 I

—山口遺跡・大ヶ瀬遺跡・平栄遺跡—

1 9 7 3

三 重 県 教 育 委 員 会
日本道路公団名古屋支社

序

埋蔵文化財の保護については、関係各機関のご理解とご協力とを得て、以前に比較して大きく前進した。近畿自動車道関・久居線の路線決定に際しても、当委員会発刊の遺跡地図を参考に、埋蔵文化財の所在地点は、極力避ける配慮をしていただいた。

今回、ここに報告する遺跡は、建設計画上、どうしても避けられなくなったため、止むを得ず発掘調査を実施した。

本書を刊行するに当り、調査に協力された日本道路公団名古屋支社・津工事事務所、県土木部の関係者をはじめ、地元関係各位に感謝の意を表するものである。

昭和49年3月

三重県教育委員会
教育長　関　根　則　之

例　　言

1．本書は、三重県教育委員会が行なった近畿自動車道関・久居線建設予定地域内の山口遺跡・大ヶ瀬遺跡・平栄遺跡の発掘調査結果をまとめたものである。

2．調査は次の体制で行なった。

調 査 主 体　　三重県教育委員会

調査費負担者　　日本道路公団名古屋支社

調 査 担 当 者　　谷本鋭次・伊藤久嗣（三重県教育委員会文化課）

3．報告書作成は、山口遺跡は谷本、大ヶ瀬・平栄遺跡は伊藤が担当した。

4．発掘調査にあたっては、県土木部用地対策課、日本道路公団津工事事務所の全面的な協力を得た。

5．発掘作業には野田自治会長東海誠一氏、池村金雄氏をはじめ地元各位の協力を得た。

6．本書の遺構標示は、下記の略記号による。

SB;　竪穴住居址

SD;　溝　　址

SK;　土　　坑

7. スキャニングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目　　次

Ⅰ　前　　言……1

Ⅱ　位　　置……2

Ⅲ　山　口　遺　跡……4

Ⅳ　大ヶ瀬遺跡……5

Ⅴ　平　栄　遺　跡……9

図　版　目　次

PL 1　山口遺跡位置図，山口遺跡発掘区平面図

PL 2　大ヶ瀬・平栄遺跡位置図，大ヶ瀬・平栄遺跡地形図

PL 3　大ヶ瀬遺跡調査前地形図，大ヶ瀬遺跡遺構図

PL 4　大ヶ瀬遺跡SD1・2，SK 3・4・5 実測図

PL 5　平栄遺跡地形図，平栄遺跡SB3・4・5 実測図

PL 6　大ヶ瀬・平栄遺跡出土土器実測図

PL 7　山口遺跡遠景，山口遺跡発掘区

PL 8　大ヶ瀬・平栄遺跡遠景，大ヶ瀬遺跡調査前近景

PL 9　大ヶ瀬遺跡全景，前方部近景

PL10　前方部周溝，前方部近景，前方部ＳＫ５内土器

PL11　後方部西側ＳＫ３内土器

PL12　平栄遺跡調査前全景，調査前近景

PL13　SB4・5，SB3

PL14　大ヶ瀬・平栄遺跡出土遺物

Ⅰ　前　　言

三重県においては、工業開発が四日市々を中心に北勢地域に集中した結果、道路の整備も中南勢地域をはるかにしのぐことになった。中南勢地域にとって、南北に縦断する基幹道路は、国道23号線のみで、ここ数年来、交通渋滞はとみにはげしくなり、渋滞緩和の施策が叫ばれてきた。また、県としても、企画していた中南勢開発計画―地元住民の反対が強く、現在は白紙にもどる―を推進していく上でも、23号線バイパスと近畿自動車道伊勢線の建設はどうしても必要であった。それに加えて、48年の伊勢遷宮、50年の国体誘致という国規模の当面の最大行事を控えて、三重県は国に対して、上記道路の建設を強く要望してきた。その結果、46年になって建設が認められるに至った。高速自動車道については、鈴鹿郡関町から久居市戸木までの区間の施工命令が、国より日本道路公団名古屋支社に対して、46年６月１日に出された。

すでに、その段階では、路線はほゞ確定していたのであるが、路線決定に当っては、建設省が事前に埋蔵文化財の分布について調査を済していた。そのこともあり、路線はもっとも埋蔵文化財の少ない地域を通ることとなり、遺跡台帳に収載されていた周知の古墳２基が路線に含まれるだけであった。しかし、念のため、路線内の分布調査を三重大学歴史研究会原始古代史部会に依頼した。分布調査は46年10月17日と24日の両日実施され、路線内に57ヶ所の遺跡を確認したとの報告があった。その報告にもとづき、教育委員会及び公団津工事事務所の担当係員が現場立会した結果、遺物散布地１ヶ所（山口遺跡）と古墳２基（大ヶ瀬２号墳・平栄１号墳）を最終的に確認し、その確認にもとづき公団名古屋支社に対して３件の埋蔵文化財の取り扱いの協議方を、47年２月３日付けで申し入れた。その後、路線が通る津市河辺町から跡部町にかけての一帯では県営圃場整備事業が進捗し、その過程で遺跡の発見が相ついだため、そこを通る路線部分については遺跡の存在が懸念されることとなり、改めて４月25日付で公団名古屋支社に対して、その部分の試掘の必要性を申し入れた。そして３件の埋蔵文化財については、発掘調査を実施して記録を作成することで公団名古屋支社と県教育委員会とは協議を了えた。

道路建設の施工命令が出されていても、用地買収が予定どおりはかどらず、公団が買収する以前に、買収に同意していた地区にある山口遺跡・大ヶ瀬２号墳・平栄１号墳の発掘調査をすることとなり、48年２月１日付けで公団名古屋支社と県教育委員会との間で委託契約を取りかわした。

調査は県教育委員会が主体となり、２月10日から実施した。調査の過程で、山口遺跡では遺構が路線内に確認されなかったり、また、平栄１号墳の周辺で、雑木を伐開したのち、新しく墳丘状の高まりを４ヶ所確認したため、平栄３～６号墳（２号墳は路線外にある）と命名して、調査計画を変更しなければならない事態が起きた。しかし、全体としては調査規模の縮少となり、委

託契約を変更して、3月20日に調査を終えることができた。

II 位　　置

伊勢湾西岸のほぼ中央部に位置する津市の西郊には、安濃川と岩田川が形成する北西から南東に続く狭長な沖積地がひろがっている。その沖積地を取巻く丘陵によって、この地域は大まかに三つの地域に分けられる。すなわち、安濃川流域の右岸一帯は、布引山系に連なる標高 819*m* の経ヶ峰から派生した山槐が東西方向にあって、標高 321*m* の長谷山と安濃川との間に比較的高い丘陵が連なっている。さらに、西方の山中から流出する岩田川が形成した幅狭い沖積地をはさんだ南側の半田丘陵は、標高約60～40*m* の尾根筋が良く発達し、谷頭水田が入り組んだ地形を呈している。一方、安濃川の左岸一帯は、安濃川の一支流である美濃屋川に沿って標高約50～70*m* の丘陵が長く続いている。

ここに報告する大ヶ瀬遺跡と平栄遺跡は、岩田川以南の半田丘陵の西北部の津市大字野田に位置し、山口遺跡は、安濃川左岸の丘陵を北に越えた志登茂川の左岸の丘陵上の芸濃町に位置している。

上述のように、安濃川流域は地形上三分類しうるが、とりわけ旧河筋の低地帯と右岸の丘陵上には数多くの遺跡が存在しており、その歴史的環境はきわめて多彩である。

先土器時代に遡上る遺跡は、現在なお未発見であるが、縄文時代中期後半頃の土器若干が、大ヶ瀬遺跡の東方の野田集落付近の岩田川沿岸で表面採集されている[註1]ので、将来さらに発見例が増加することと思われる。弥生時代に入ると遺跡が増加するが、中でも納所（のうそ）遺跡は古くから知られており[註2]、弥生時代前期から古墳時代を経て、中世に至る大遺跡である。この他に弥生時代前期の遺跡としては、上村遺跡[註3]と長谷山古墳群[註4]中からも少量ながら土器が出土している。弥生時代中期の遺跡としては、上記のほかに亀井遺跡、清水遺跡[註5]があり、半田丘陵上の神戸から、古く扁平鈕式流水文銅鐸1個[註6]が出土している。弥生時代後期になると遺跡数が激増し、安濃川左岸の低地帯には帯状に遺跡群が点在し桐山遺跡、森山遺跡、コウゼンジ遺跡、宮代遺跡、市場遺跡、竹川（たけこ）遺跡、大御堂遺跡[註7]等が知られている。一方、この時期には沖積地中央の納所遺跡のほかに養老遺跡[註8]がある。さらに安濃川右岸の半田丘陵上にも、前述の上村遺跡をはじめとして、柳谷遺跡[註9]、大ヶ瀬遺跡[註10]、宮前遺跡、半田高松遺跡[註11]、高松弥生墳墓[註12]があり、野田付近では突線鈕式横帯文銅鐸1個が出土している[註13]。古墳時代では、前期古墳としては、岩田川左岸に近い坂本山古墳群[註14]が知られているのみで、集落遺跡としては納所遺跡、竹川遺跡から古式土師器が出土している。中期古墳は、安濃川中流の明合（あけあい）双方中方墳[註15]が著名であるが、この他少数ながら鎌切古墳[註16]、殿村古墳などの小型の前方後円墳が点在するものの具体的な内容はほとんど不明である。

後期古墳は、安濃川右岸、とりわけ長谷山東側山麓の尾根上に約 400基もの円墳を主体とする群集墳が濃密に分布し、他地域と比較して特異な存在である。また、岩田川流域の丘陵上には高井古墳[註17]をはじめとして、小規模な横穴式石室が点在する。半田丘陵上にも小規模な円墳が点在し、6世紀前半頃の元井池古墳[註18]の墳麓からは埴輪円筒棺、甕棺が伴出して注目される。安濃川左岸一帯は、これまで比較的古墳が数少ない地域とされていたが、最近、堂山古墳[註19]の調査中に近接して前方後円墳1基が確認された他、長岡町の君ヶ口古墳[註20]では横穴式木室形式の埋葬施設が確認され、この地域と長谷山地域との比較についても新らたな関心を呼んでいる。

奈良時代以降、中世に至る遺跡は寺院址、墓址、城址が点在するほか中世の集落址については土器類の発見例は漸増しているが実態は明瞭ではない。なお、集落址としては岩田川沿岸の新畑遺跡[註21]で掘立柱建物が1軒確認されているのみである。また、条里遺構も沖積地一帯に比較的良く残っている。なお、中世墓址としては、坂本山古墳群に重複して5ヶ所の墓址が確認されている[註22]が、火葬と土葬が混在するとともに、一納骨器に複数の改葬骨を収納していることは興味深い。

以上、簡単に安濃川流域の地形と歴史的環境について述べてきた。この地域の歴史的変遷については、なお究明すべき諸問題は数多い。今回の3遺跡の調査は、小規模な範囲にとどまるとはいえ、一つの鍵を示すものとして位置づけられるものである。

註

1 『堂山古墳発掘調査概報』安濃村教育委員会 1973
2 櫪本杜人『三重考古図録』 1949
3 吉村利男『上村遺跡発掘調査報告』津市教育委員会 1972
4 「津市長谷山古墳群について」(『三重の文化』 15) 1958
「長谷山古墳群調査中間報告」(『ふびと』8)三重大学歴史研究会 1958
5 1973年、県教育委員会調査
6 前掲註2
7 下村登良男・谷本欽次『養老・森山B・桐山遺跡発掘調査報告—付・竹川遺跡—』三重県教育委員会 1972
8 前掲註7
9 1971年三重大学歴史学研究会調査
10 前掲註9
11 「津市高松弥生遺跡について」(『古代学研究』37)三重大学歴史研究会 1964
12 谷本鋭次『高松弥生墳墓発掘調査報告』津市教育委員会 1970
13 前掲註2
14 小玉道明ほか『坂本山古墳群・坂本山中世墓群』津市教育委員会 1970
15 「三重県安芸郡明合方墳について」(『ふびと』7)三重大学歴史研究会 1958
16 「津市鎌切古墳について」(『ふびと』22)三重大学歴史研究会 1964
「安濃川流域の前方後円墳について」(『ふびと』29) 同 上 1968
17 小玉道明「原始古代」(『伊勢片田村史』)片田村 1959
18 服部貞蔵・小玉道明ほか『元井池古墳発掘調査報告』津市教育委員会 1969
19 前掲註1
20 1973年津市教育委員会調査
21 吉村利男『新畑遺跡発掘調査報告』津市教育委員会 1973
22 前掲註14

III　山口遺跡

県道津－関線（伊勢別街道）を関町に向って芸濃町に入ると右手の丘陵下に三重大学農学部の農場が見られる。この街道の右側は志登茂川による幅の狭い沖積地がひらけている。更に北側を並行して流れる中ノ川とにはさまれた丘陵は標高50～80m前後である。そして志登茂川の沖積地に向って、小さな開析谷が数多く見られる。農場の西側にも青木谷池の谷が、更にその西にも幅30mの小さな谷がある。この二つの小さな谷にはさまれて、南につき出た台地状の畑地に山口遺跡は存在する。遺跡発見の端緒は昭和46年10月の路線内の分布調査に於いて、須恵器片、サヌカイト片を数点採集したことによる。その際、遺跡の範囲は西側の畑地部分で、約2500m²の小規模なものと想像されていた。又、畑の地主の話によっても、開墾時に少なからずの土器片の出土はあったという。

山口遺跡の周辺の遺跡を見ると、南東につづく丘陵の尾根上の豊里村地内に細越古墳や道慶古墳、切畑古墳等の円墳が見られる。同じ芸濃町では安濃川の流域に弥生以降の興、多聞、馬屋町といった遺跡が見られるのに対し、志登茂川の流域にはめぼしい遺跡は見当らない。一方、丘陵の裏側、中ノ川の流域には田茂、岩瀬、下ノ庄といった古墳時代以降の須恵器、山茶椀片等が採集されている遺跡がある。

遺跡は標高59～62mの西に向ってゆるやかな傾斜地で、その後は急な傾斜の山林となっている。遺跡と西側の水田面との比高は約5mある。一部分茶畑であるが、大部分は普通の畑である。しかし調査前には遺物の散布は殆んど見られなかった。

近畿自動車道はこの山口遺跡の西端部を横切る形で走ることになっており、調査対象地域は約1000m²におよぶ。試掘調査は芸濃町教育委員会の協力を得て48年2月に行なった。道路センター杭を基準に2m幅のトレンチを設定し、更にそれに直交する形で二本のトレンチを設定した。耕作土は暗褐色土で10～15cm程度である。その下はすぐ地山の黄褐色土となっている。トレンチで約 120m²を調査したが全く遺物の出土はなく、地山面に於いても遺構らしきものを認めることが出来なかった。

山口遺跡は当初の予想とは異なり、何ら得る所はなかった。遺跡はこの部分までおよんでおらず、あるいはもっと東側の山に近い個所かもしれない。それとも、開墾時に既に破壊してしまったものであろうか。

Ⅳ　大ヶ瀬遺跡

1　地　　形

大ヶ瀬遺跡は、津市大字野田字大ヶ瀬に属し、これまで大ヶ瀬２号墳と呼ばれ古墳とみなされていた（県遺跡番号4498)。

野田集落から南へ続く標高約28～30mの丘陵は、ほぼ南北に連なり、さらに小枝谷が複雑に入組んでいる。大ヶ瀬遺跡は､南西から北西に向って伸びるこの小枝谷を見降す丘陵の標高約27.60mの尾根に位置し、東方は野田から久居市へ通じる道路を越えて、東西幅約 300mの水田に面しており、水田面との比高は約20mである。遺跡が所在する尾根は、松林と雑木が茂っており東側が急傾斜をなしているほかは、北・南・西側は割合ゆるやかな起伏を呈していた。なお、南側はやゝ低まりをなす鞍部からゆるやかに高まっているので、遺跡の部分は独立した尾根の最高所に当っている。調査前の測量では、南北約12m、東西約９mの長方形を呈し、高さは約１mを測り、北側では頂上から－50cm、－75cmの等高線が方形に突出するので、方形墳か前方後方墳の可能性を推定させた。

2　遺　　構

1　墳　　丘（ＰＬ３・８・９）

調査は先ず墳頂部に十字形のトレンチを設定した。その結果、厚さ５～10cmの腐植土層の直下に灰黄色～黄褐色の地山を全面で検出したが、遺構・遺物はなんら検出しなかった。

次いでトレンチを北側に延長し、地山面を切る東西に連なる溝址と、層厚10～15cmの灰褐色砂質土の盛土部分と、盛土を乗せる部分の地山が方形状に整形加工されたものであることを確認した。そのため全面にわたって表土層を除去するとともに、地山の整形加工部分の続きを追い、西側と北側に弥生式土器を埋納した溝址（ＳＤ１・２）と土坑（ＳＫ３・４・５）を検出した。

墳丘は、地山の灰黄色砂質土を整形加工したもので、盛土は北側の前方部に残っていたのみである。地山の整形加工は、丘陵頂上部に平行した部分が長く南北約19m、東西は南側で約10.3m、北側で約 8.2mの範囲でほぼ長方形を呈するが、東西幅は東側が急斜面のため崩落していると思われるので、当初は北側に近い幅で加工されていた可能性もある。なお、地山の整形加工個所は、墳麓の西側にもみられるが、樹木保存のために、小トレンチで確認したにとどまった。

墳丘の地山整形のうち、比較的保存状態の良好であった西側では、墳頂部を東西に切り込んでくびれ部を作り、前方部を整形加工して作り出している。前方部の南北の長さは、東側で約４m、

西側で約 3.5m を測り、東西の幅もくびれ部基部で約 5.3m 、北側先端部で約 4.6m と左右対称でない。したがって、後方部は東西約10.3m 、南北約８～９ m で、前方部北側との比高は約75cm であるが、築造当初は後方部にも盛土があったと思われるので、後方部墳頂と墳麓西側との比高約１ m ももうすこし高いものとなろう。なお、後方部の東・南側の周溝の有無は不明である。

前方部の北側は、ゆるやかに傾斜する地山面が北へ向い、約6.7 m で墳丘裾に達するが、このテラス状の部分にも後方部と同様になんら遺構、遺物を検出しなかった。

2 溝　　址（ＰＬ３・４・10）

ＳＤ１　後方部西側の墳麓に平行する小溝で、南端はやゝ東へ蛇行しながら斜面で消滅している。幅約30cm、深さ約20cmのＵ字溝で、北端は土坑状をなしてひろがっている（ＳＫ３）。埋没土は暗茶色砂質土の単純層で、溝底は地山を掘り込んでおり、溝上部には東側の後方部からの盛土の流出土である淡茶灰色砂混り粘質土が覆っており、同溝の掘られた時点の下限を知りうる。北端のＳＫ３以外の溝中からは、弥生式土器と思われる小土器片が少量出土したのみである。

ＳＤ２　前方部を東西に横断する溝で、中央部が最も幅狭く約 106cm、深さ約20cmの傾斜のゆるやかなＵ字溝である。溝の南縁は、東と西であたかも後方部とのくびれ部の形状に沿うように作られており、西端はくびれ部から北へ続く地山整形加工の縁辺に接して終るので、前方部が作られた後に掘り込まれたものであり、南北断面でも北縁は前方部の盛土を切りこんでいる。東端は、急斜面のため消滅しているが、やゝせばまりをみせており、東西約 7.7m である。くびれ部に近い溝の端は、土坑状に溝底が深まり、幅も広くなって弥生式土器が出土した（ＳＫ４・５）。なお、溝底は中央部が高く、東端と西端は約70cm低く掘られており、地山を切って掘り込まれている。溝内埋没土は、両端部に厚くみられ、上層から茶色砂質土、暗茶色砂質土、茶褐色砂混り粘質土と続き、特に溝の両端部に堆積している暗茶色砂質土には多量の炭化物が包含されていた。

3 土　　坑（ＰＬ３・４・11）

ＳＫ３　ＳＤ１の北端部にあり、長さ約 2.7m 、幅約70cm、深さ約20cmの船形土坑で、ＳＤ１と同時に掘られたものである。坑内は暗茶色砂質土の単純層で、炭化物粒を少量含んでいる。坑内の南に片寄って弥生式土器の台付椀と壺が坑底面で並んで出土したが、壺は散乱状態であった。

ＳＫ４　ＳＤ２の西端部にあり、東西約 1.5m 、南北約 1.3m 、深さ約30cmの楕円形の土坑で、東端部はＳＤ２の溝底と僅かな起伏を作るほどで明らかでない。埋没土もＳＤ２と同様であるが坑中央部に淡茶色砂混り粘質土の薄いレンズ状堆積がある。遺物は弥生式土器の壺１個のみで、坑の西側壁に沿って坑底から若干浮いた状態で出土した。

ＳＫ５　ＳＤ２の東側にあり、ＳＫ４にくらべると大型で、東西約２ m 、南北約２ m のほぼ三角形に近い平面で深さ約40cmである。坑底は、ＳＤ２の底面に沿って西から東へ傾斜するが、西

端で約20㎝ばかり深く地山を切り込んでおり、埋没土はＳＤ２と同じである。遺物は、弥生式土器の壺と高杯の２点のみで、壺は坑底面から出土し、高杯は坑底から約20㎝上部で出土したが、高杯の出土層位はＳＫ４の壺と同層である。

3　遺　　物

○ＳＫ３出土遺物（ＰＬ６・14）

壺(1)　口径11.2㎝、腹径22㎝、ゆるやかに外反する短い口頸部の下に、最大腹径がやゝ下にくる大きく外膨する腹部からなる器形で、底部は欠失している。頸部と腹部との交に細い刷毛目をつけたのみで、腹部は縦位のヘラ磨きをほどこす。腹部内面には細い刷毛目を密につける。明赤褐色、胎土精良。

台付椀(2)　口径13.3㎝、高さ約20㎝、直線的に内反する口縁部から丸味をもって外膨する腹部をもつ椀に、ゆるやかに裾がひろがる脚部をもつ器形である。全体に保存状態が不良のため調整は不明であるが、椀部はヘラ磨きがのこる、脚部との接合部の内面中央部は円形の粘土板を充塡している。脚部に櫛描横線を四条配し、その間を刺突列点文がめぐる。

○ＳＫ４出土遺物（ＰＬ６・14）

壺(4)　口径13㎝、く字形にするどく外反する短い頸部に、丸い腹部をもつ器形で、底部はわずかに上底である。保存状態が不良であり、底部内面のヘラおさえ痕跡が残るのみである。文様は腹部上部に櫛描横線２条を配し、その間を刺突列点文が密にめぐる。

○ＳＫ４出土遺物（ＰＬ６・14）

壺(5)　底部と腹部下半の破片で、口縁部を欠く。厚手の土器で、底部はわずかに上底である。腹部外面は刷毛でなでつけた上を、部分的にヘラ磨きをし、内面は全体をていねいになでつけている。堅質で焼成良好である。

高杯(3)　口径23㎝、丸味を帯びた底部からするどく外反する頸部をつくる稜の強い杯部で、口縁端部はやゝ角張っている。脚部はほとんど欠失しており、杯部の接合部内面は円形の粘土板を充塡している。杯部は内外面全体をていねいにヘラ磨きし、口縁部は横なでしている、脚部はほとんど欠失するが、櫛描横線１条が残る。明灰褐色を呈し、胎土精良で焼成良好である。

4　結　　語

冒頭に述べたごとく当遺跡は、古墳とみなされていた。ところが調査の結果、弥生式土器が伴出したため、古墳でないことが明確となった。これらの弥生式土器は、伊勢湾西岸の編年で後期前半の上箕田Ⅳ式に当るものと思われる。次に構造上の特徴であるが、尾根の頂上部を利用し、

かつその周辺部の地山を整形加工している点や、前方後方形の整形加工と前方部のみではあったが盛土の存在、また、周溝の存在などを総合すると、いわゆる「弥生墳墓」と呼ばれるものに類似している。周溝の端部の土坑（ＳＫ３・４・５）出土の土器類も一部欠失しているものもあるが完形であって、供献的埋納と推定される。後方部の中央には埋葬施設を検出しえなかったが、恐らく流出して消滅したものと思われる。

当遺跡の東南約３㎞の標高約40ｍの尾根上には、同時期に営まれた高松弥生墳墓[註1]がある。高松弥生墳墓は、墳丘の長径10ｍ、短径６ｍ、高さ0.5～0.7ｍの楕円形を呈し、墳頂部に盛土があって地山を掘り込んだ２個の土坑があり、坑内からは朱彩と穿孔を施した壺、高杯、台付鉢、器台等と管玉、鹿角装刀子が出土している。周辺には小規模な住居址と思われる包含層が確認されているので、弥生時代後期前半における丘陵上に集落を構えた共同体に関連した個人的な墳墓と考えられている。この高松弥生墳墓とくらべて、当遺跡は立地はともかく形態や出土遺物に共通性がない。したがって、積極的に「弥生墳墓」とは断定しえないが、その蓋然性が高いものと考えておきたい。もし「墳墓」とすると後方部西側と前方部にある周溝は、仮に南と東にも存在したとすれば、方形周溝墓との類似性を指摘しうるのではあるまいか。この点については将来沖積地の遺跡における墓制が明確になった上で、考究していきたい。

伊勢湾西岸地域の弥生時代後期の遺跡については、従来この大ヶ瀬遺跡が位置する安濃川流域において極めて特徴のある分布が指摘されている。[註2]すなわち、この時期に至って、小規模な遺跡が沖積地を見降す丘陵の裾部に位置するものと、前代に引続いて沖積地に位置するものとの二様相に分けられるという事実である。沖積地の遺跡群についても、立地上さらに細分の可能性が指摘されている[註3]のであるが、基本的にこの弥生時代後期前半の集落の在り方の二様相が、単に一時的な現象とは考え難い点は両者が次の古墳時代以降も生活の場として継続していることからも窺える。ただ、後者の場合、次章の平栄遺跡では弥生後期前半に限定されている。したがって、この現象については、単なる分村の結果とみるべきか、または他の要因に基づくものかについては弥生時代後期前半の２・３世紀の交の時点における安濃川流域の諸共同体間の政治的関係の中で位置づけるべき課題であろう。この課題については、半田丘陵で出土した二個の銅鐸の歴史的性格や、さらには同流域における古式の前方後円墳の欠除など、まさに伊勢湾西岸における弥生時代中～後期から古墳時代前期へかけての変遷を探る上で、あらためてこの大ヶ瀬遺跡が重要な鍵を持つ遺跡であることを指摘して後考を俟ちたい。

なお、本遺跡は墳丘東側の崩落部が道路のり面にかかるが、主要部は調査後盛土をし、原状に復した。

註

1　谷本鋭次『高松弥生墳墓発掘調査報告』津市教育委員会　1970

2　前掲註１

3　下村登良男、谷本鋭次『養老・森山Ｂ・桐山遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会　1972

V　平栄遺跡

1　地　　形

平栄遺跡は、津市大字野田字平栄に属し、これまで平栄古墳群として２基の古墳が登録されていた（県遺跡番号No.4491～92)。遺跡は前述の大ヶ瀬遺跡の南方約 300m に当り、谷水田をはさんで南北に対向する位置にある。現地形は標高約30m の丘陵頂部から東北に向う標高約15～17m の傾斜地にあり、水田面からの比高は約８m である。平板測量の結果あらたに小支脈の先端部４ヶ所が古墳状の高まりをみせていることを確認したので、これを平栄３・４・５・６号墳と名付けた。なお、２号墳は路線外に位置しているので、調査は１・３～６号墳と名付けた個所を対象とした。調査の結果、３・４・５号墳は古墳ではなく弥生時代の竪穴住居址であることが判明し、１号墳は弥生式土器の薄い包含層の堆積で明確に住居址とは断定できなかった。なお、６号墳は地形測量に先行して試堀を行なったが表土直下に地山を検出し、なんら遺構、遺物はみられなかったため、地形測量を省略した。以上の結果、名称を平栄遺跡と改め、３・４・５号住居址と呼ぶことにした。

2　遺　　構

1　竪穴住居址（ＰＬ５・12・13）

ＳＢ３　調査前の地形は、一辺約８m、高さ約1.75m の方形墳を思わせたが、南西側で表土直下に黄褐色砂質土の地山があり、北へ向うにつれて弥生式土器と木炭粒を含む包含層が堆積している。壁面は西辺と南辺の尾根の高い方のみに残り、一辺約 3.6～４m の方形プランで、堀り方は約70cmである。柱穴は西辺に平行する径20～40cm、深さ20cmのピット２個と西南隅柱の東に近接して小ピットが残るのみである。遺物は弥生式土器の小片が多いが遺存状態はきわめて不良である。

ＳＢ４　ＳＢ３の北西約13m に位置し、尾根から派生した一支脈の頂上に南辺を置く方形プランである。南辺のみほぼ全容が判明しうるが約４m で、地山を切る堀り方は約55cmである。南辺と西辺の一部には壁面に沿って幅30cm、深さ５～10cmの周溝がめぐっている。柱穴は南辺に平行して２個を検出し、直径20cm、深さ約10cmを測る。遺物は弥生式土器の小片若干がある。

ＳＢ５　ＳＢ４の西約８m に位置し、方形プランを呈している。西辺と南辺の一部を残すのみであるが、西辺は約 4.6m で、掘り方は約40cmを測る。柱穴は、南西部隅柱１個のみを検出したにとどまり、直径約25cm、深さ約８cmである。遺物は弥生式土器の小片がかなり出土したが、保

存状態はきわめて不良である。なお、北東部の崩落土中から石鏃１点を採集した。

2 包 含 層

ＳＢ３の西約６～10mの斜面に位置し、標高17m前後の部分に東西 2.5m、南北 4.5mの範囲に当り、中央部で約50cmの厚さのレンズ状の炭化物を多量に含む黒色有機質土層を検出した。地山を切り込む掘り方がないためこれを住居址と断定する積極的な材料はないが、断面にピット状の落ち込みが１個所あるのでその可能性もある。遺物は弥生式土器の小片のみ若干が出土した。

3 遺　　物

遺物は、弥生式土器、土錘、加工軽石があり、土器はすべて遺存状態がきわめて悪く、水洗に耐えるものは皆無であった。

○ＳＢ３出土遺物（ＰＬ６・14）

壺(14) 口縁部がやゝ長目に立上る形式で、直径12.5cmの口縁部破片のほか、底部は中央部を上底にする例が多い(18)。腹部は破片のみであるが、櫛目状工具による横走する沈線を２個所以上にめぐらし、その中間に櫛状工具による刺突列点文を密にめぐらしたものである。

甕(11) 口径15cmの口縁部破片で、く字形に屈曲する頸部に刷毛目がのこる。なお、腹部破片には表面に粗い刷毛目を付すものもある。

高杯（６・８） 筒状の脚部が長いものと、ゆるやかに裾がひろがる二種類がある。６は、長目の脚部に櫛描横線を三条配したもので、透し孔は上に１孔、下に１孔以上がある。内面はシボリ目が顕著で、裾部に刷毛目を付す、杯部は完形でないが、脚部との接合は粘土円板を充塡した痕跡がある。８は、脚部が短く裾が大きくひろがる器形である。櫛目文を二条以上配したもので、その間に細い刺突列点文がめぐる。杯部の破片は少量であるが、頸部の稜がゆるやかで口縁部が大きく、外反し、口唇部は僅にふくらんでいるものが多い。

土錘(17) 直径2.7～2.5cmの円球で、短径の中央に径0.8cmの穿孔がある。全体になめらかで、焼成は堅質である。

○ＳＢ４出土遺物（ＰＬ６）

高杯(9) 脚部は櫛描横線を三条配したもので、外面はなめらかで、内面には裾部に粗い刷毛目が横走する。口縁部は小片であるが、口唇部の内側がやゝ斜目に肥厚し、口縁部が大きくひろがるものである。なお、脚部は破片のため、透し孔は不明である。

甕(12) 口径約15cmの口縁部破片で、調整は不明である。

加工軽石 一辺約４cmの方形で、厚さ約３cmのものと、径約 3.5cmの楕円形のものがある。いずれも各面を擦っているが用途は不明である。

○ＳＢ５出土遺物（ＰＬ６・14）

甕(13) 口径15cmの口縁部破片で、短く外反する頸部が口唇部でやゝ直立して受口となる。頸部に櫛状工具による刺突列点文を配し、細い刷毛目を縦横につけている。

高杯(7) 長い筒状の脚部で櫛描横線を４条配したもので、透し孔は上に１孔あり、下はおそらく３～４孔のものであろう。この他、台付壺の破片もあるが図示しえない。

○包含層出土遺物（ＰＬ６）

壺、甕、高杯などがあるが、遺存状態はきわめて悪い。

高杯(10) 厚手の筒状脚部で多条の櫛描横線を２条配している。透し孔は上に１孔あり、下は欠失している。内面はシボリ目が著しく、全体に堅緻な作りである。

4 結　　語

平栄遺跡は、調査範囲が路線内に限定されてはいたが方形プランの住居址３軒と包含層１個所を確認した。

竪穴住居址は、完全な形ではなかったが、一辺約4～4.5mの形態で、壁面に接して周溝を作るものもある。その占地については、緩かな斜面をもつ小さな尾根の高まりに位置していることが共通している。これらの住居址の時期は、伴出した弥生式土器が伊勢湾西岸の編年上、上箕田Ⅳ式に類似しており後期前半に比定することができる。したがって、標高15m前後で、東側の開析谷を見降す水田との比高約８mの緩傾斜地におそらく10数軒の集落が営まれていたものと思われる。

本書のⅣ大ヶ瀬遺跡で述べたごとく、安濃川流域における弥生時代後期の集落の分布は特徴的であるが、この平栄遺跡は、沖積地を望む丘陵頂上部とその縁辺部に営まれた丘陵性集落と呼びうるものである。この時期には、同じ丘陵上の尾根筋に大ヶ瀬遺跡（大ヶ瀬１号墳）、柳谷遺跡[註1]などの小規模な集落が散在している。占地の上で、丘陵頂部の平坦面と緩斜面の差がこれら同時期に併存したと思われる集落に指摘しうるのであるが、平栄遺跡では弥生後期前半のみで断絶していると思われる。したがって、前述した大ヶ瀬「弥生墳墓」を営みえた集落が、丘陵性集落と総称される範疇に含みえても、少数ながら土錘が伴出されるなど小河川を含む地域を生業の場としていたことは否めない。このことは高松弥生遺跡[註2]、高松弥生墳墓[註3]とにおいても考えうるのであって、丘陵性集落の消長の究明も、今後の課題の一つとなるであろう。

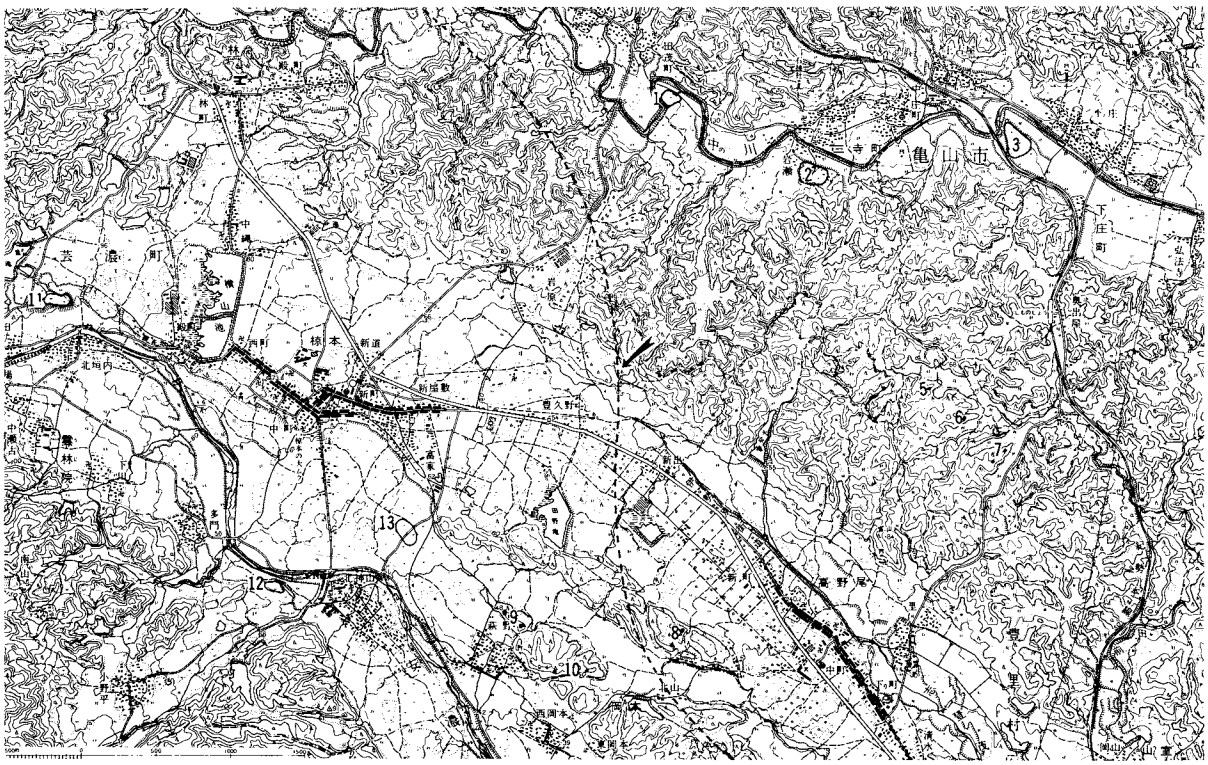
註

1　1971年三重大学歴史学研究会調査

2　「津市高松弥生遺跡について」（『古代学研究』37）三重大学歴史研究会　1964

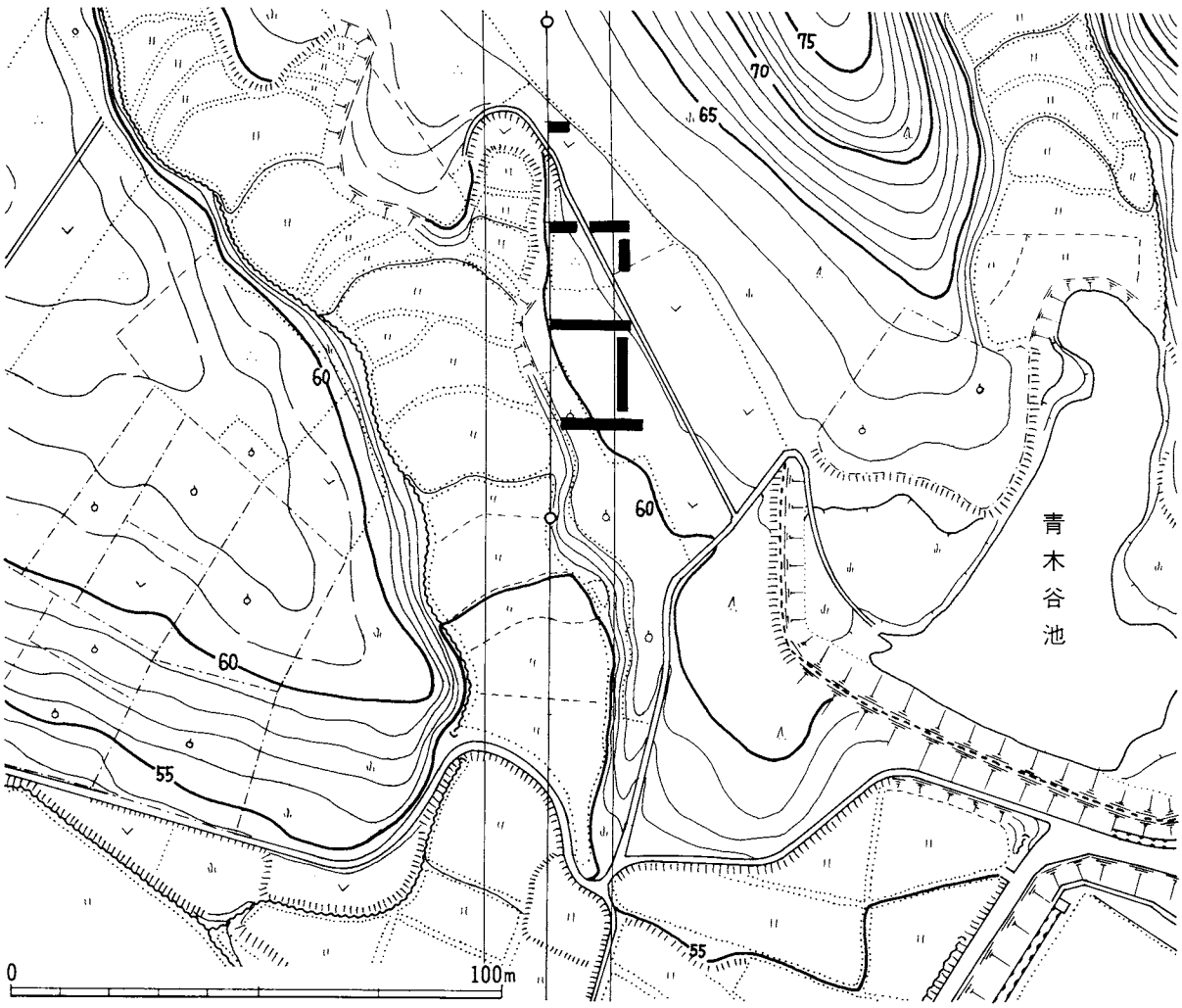
3　谷本鋭次『高松弥生墳墓発掘調査報告』津市教育委員会　1970

図　　版

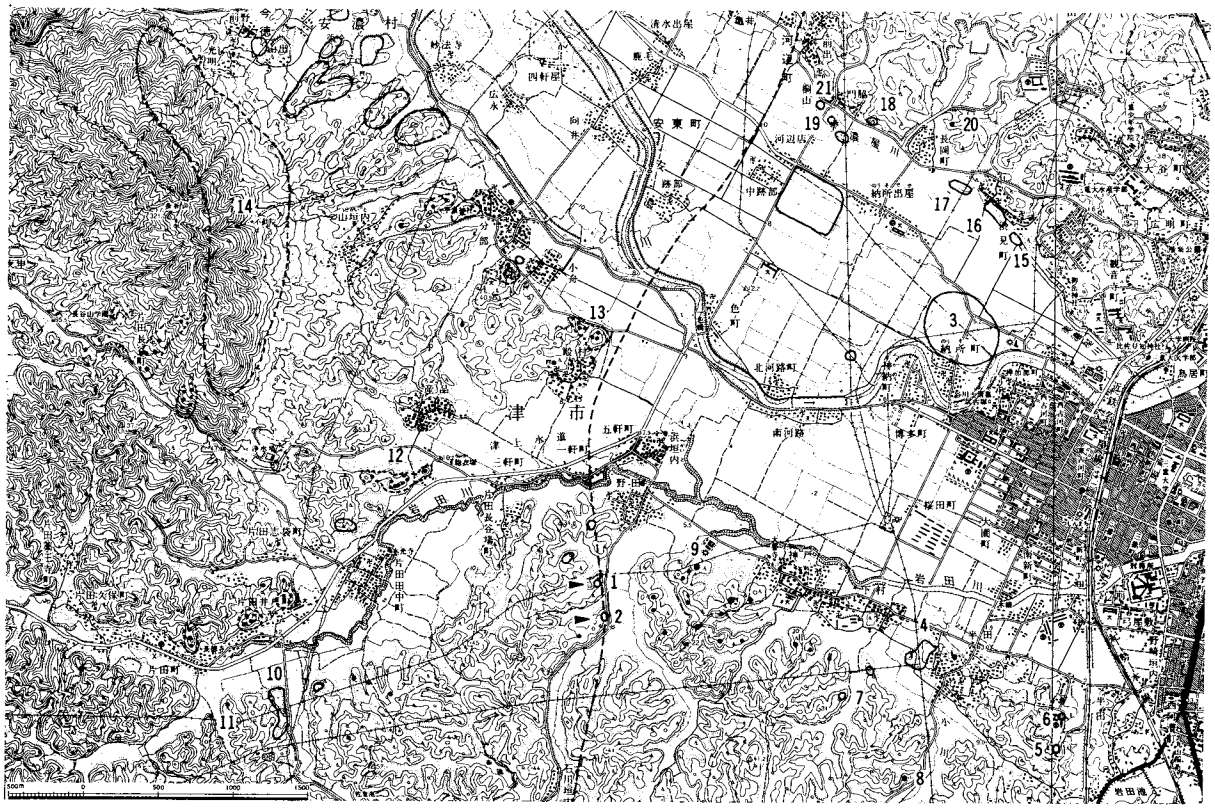


山口遺跡（矢印）位置図　（1：25000；椋本．国土地理院）

1．田茂遺跡　2．岩瀬遺跡　3．下ノ庄遺跡　4．細越古墳　5．切畑古墳　6．道慶古墳　7．七曲古墳
8．三月田古墳　9．大屋垣内古墳　10．萩野北東丘陵上古墳　11．興古墳　12．多聞遺跡　13．馬屋町遺跡



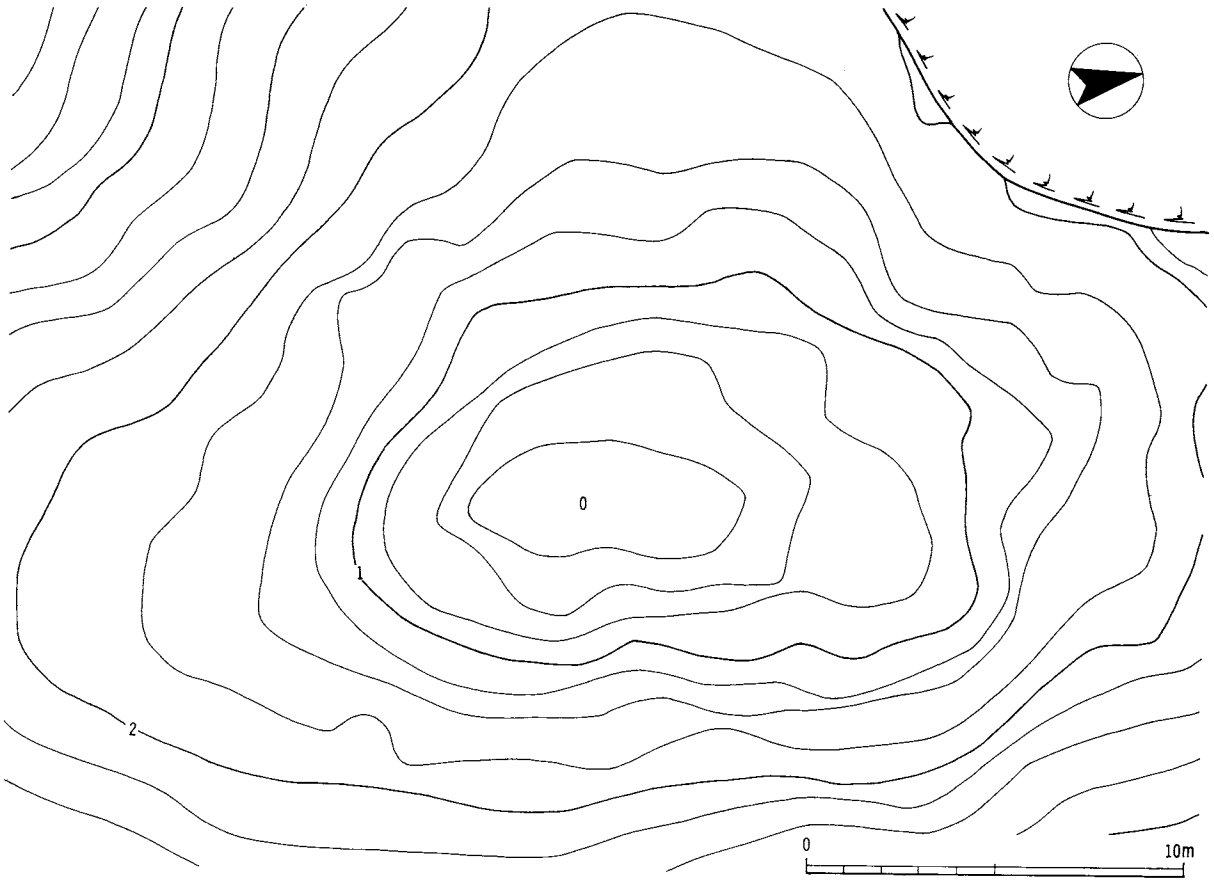
山口遺跡　発掘区平面図　（1：1500）



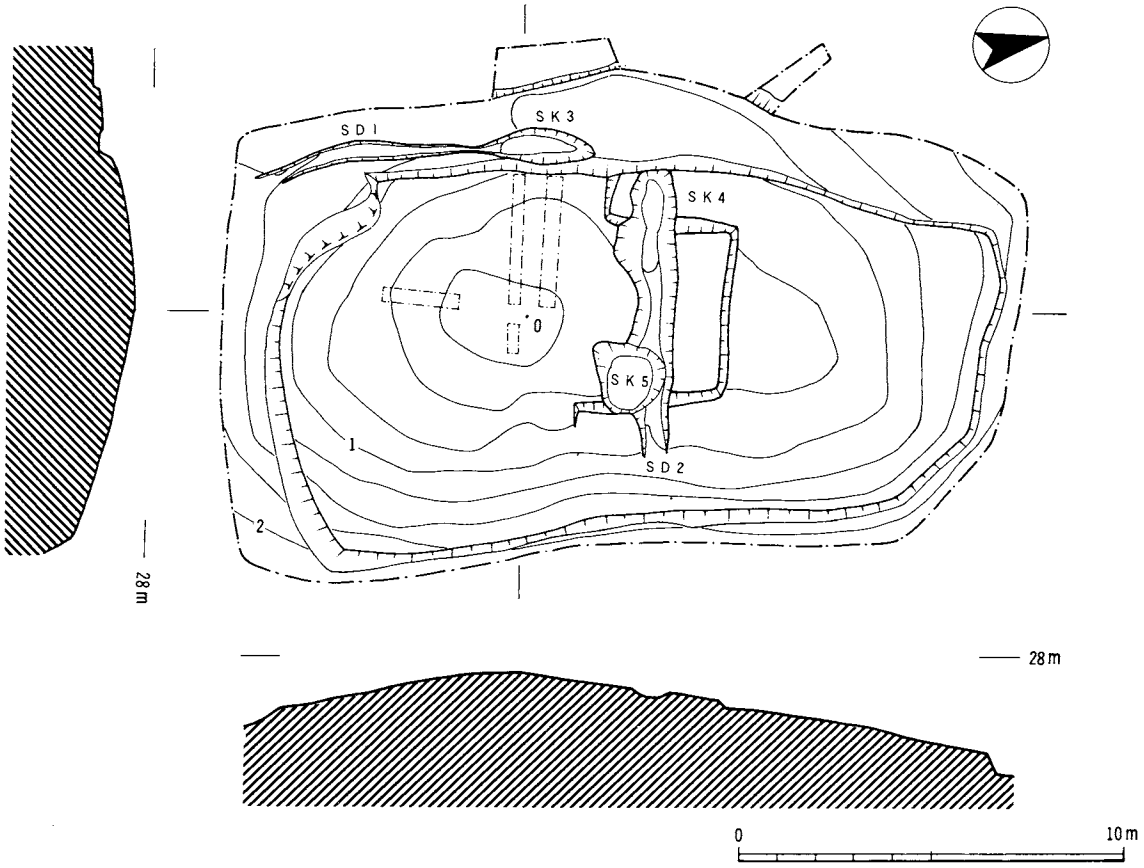
大ヶ瀬・平栄遺跡位置図 (1:25000 津西部・津東部)

1. 大ヶ瀬遺跡 2. 平栄遺跡 3. 納所遺跡 4. 上村遺跡 5. 高松弥生墳墓 6. 高松遺跡 7. 神戸銅鐸 8. 元井池古墳 9. 鎌切古墳 10. 新畑遺跡 11. 高井古墳 12. 坂本山古墳群 13. 殿村古墳 14. 長谷山古墳群 15. 竹川遺跡 16. 市場遺跡 17. 宮代遺跡 18. コウセンジ遺跡 19. 森山遺跡 20. 君ヶ口古墳 21. 桐山遺跡

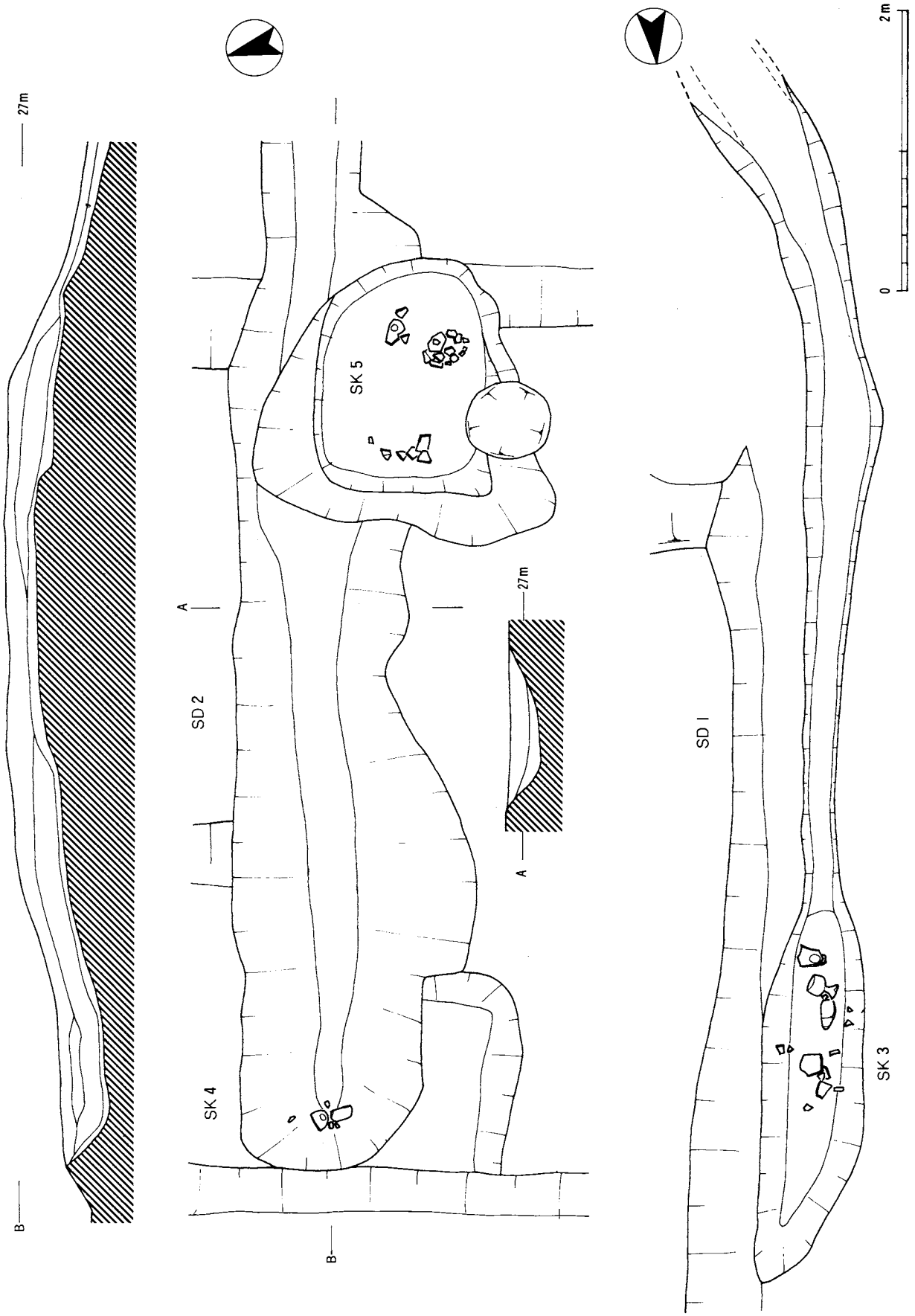
大ヶ瀬・平栄遺跡地形図 (1:2000)



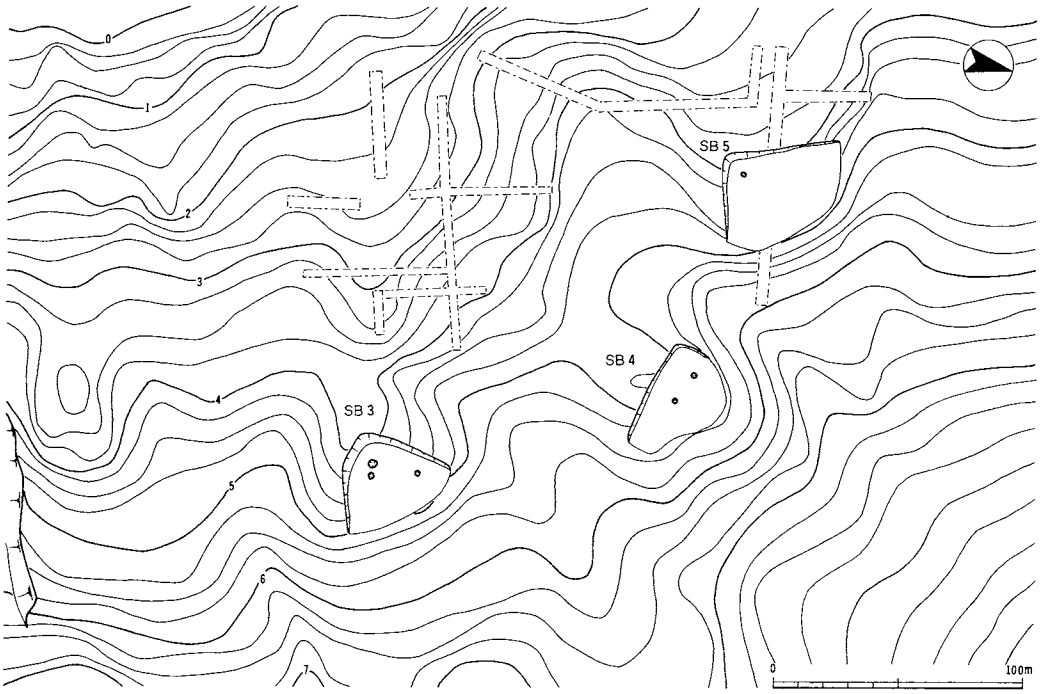
大ヶ瀬遺跡　調査前地形図　（1：200）0 →標高27.60m



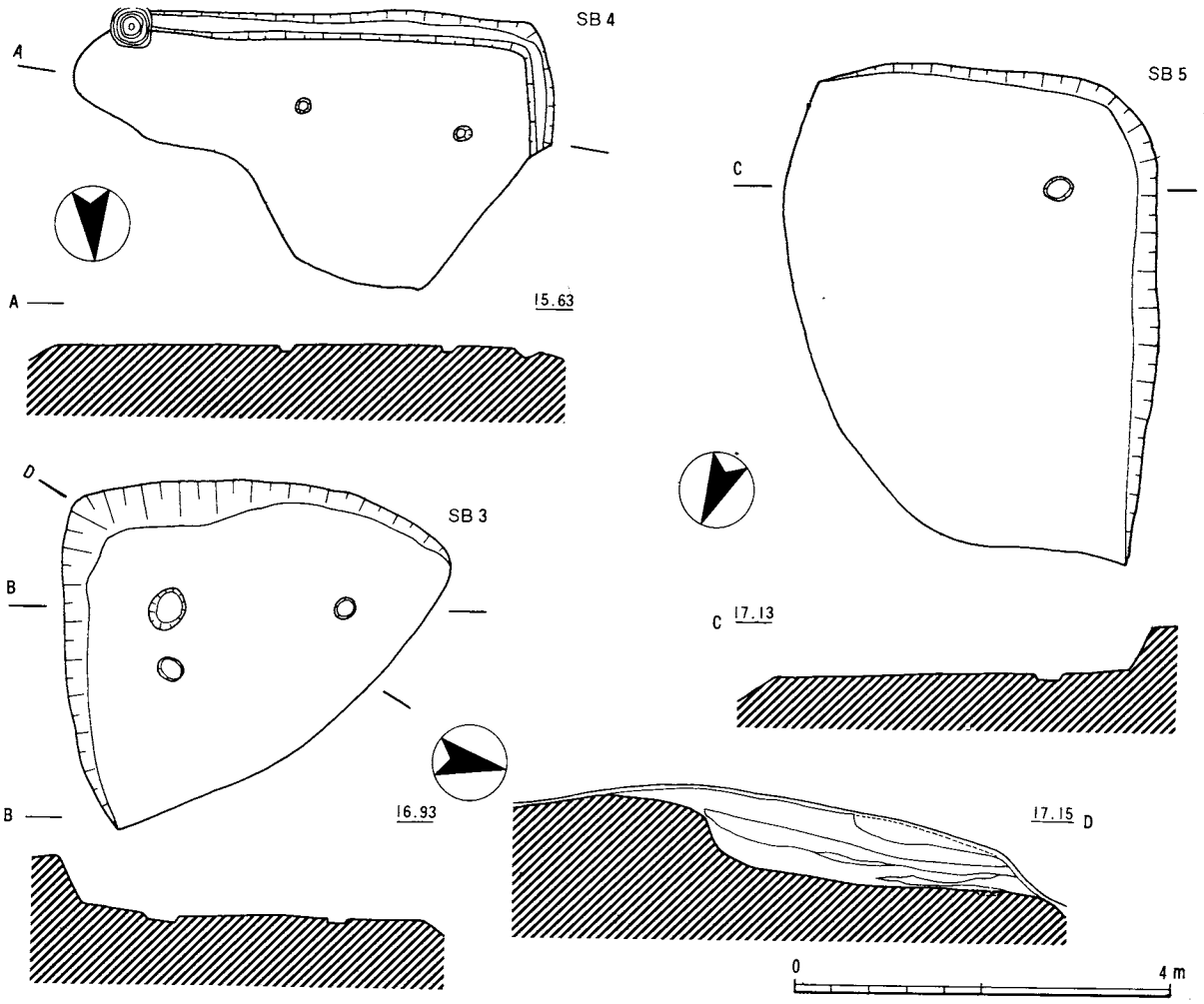
大ヶ瀬遺跡　遺構図　（1：200）



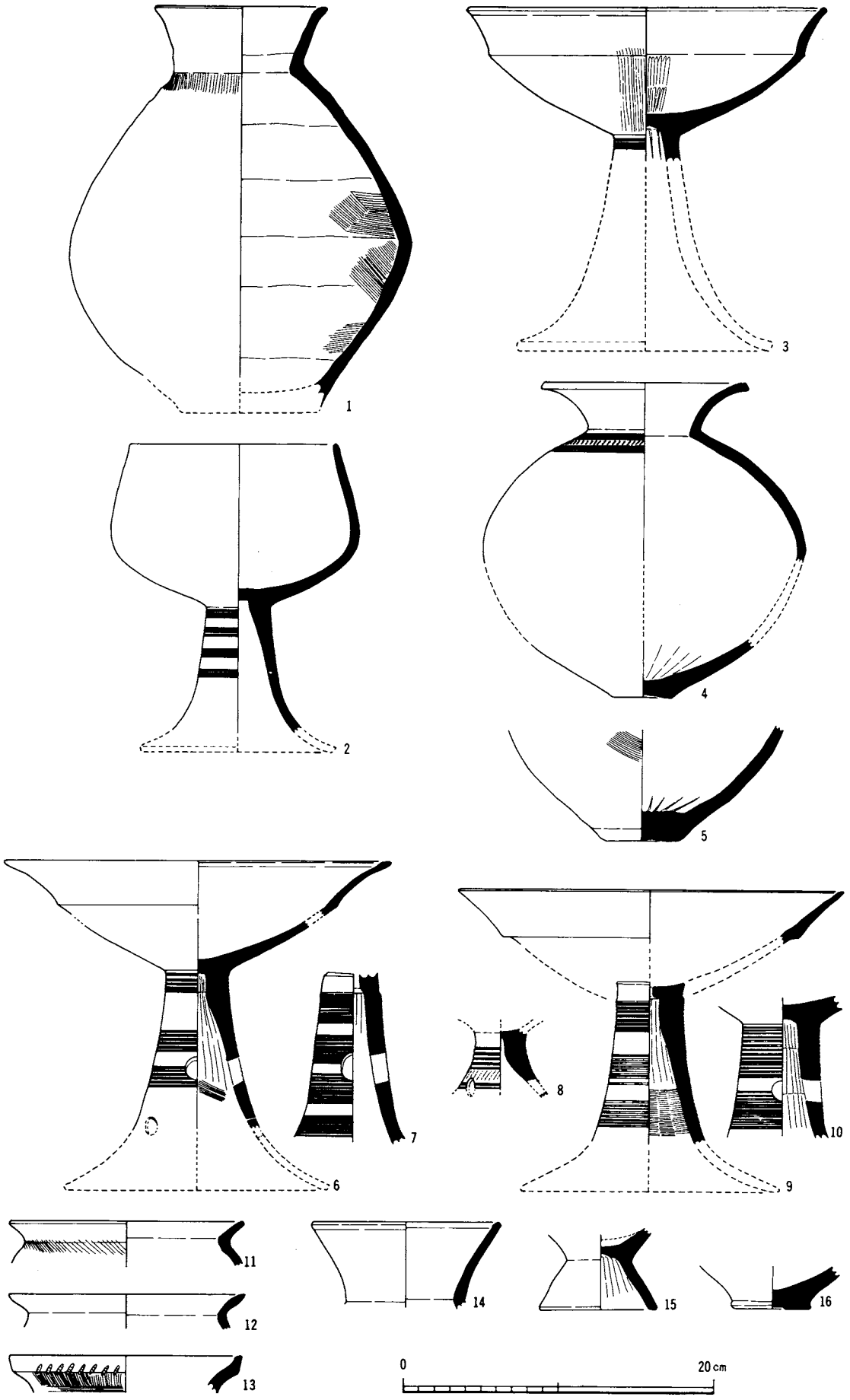
大ヶ瀬遺跡　SD I・2, SK 3・4・5 実測図（1：40）



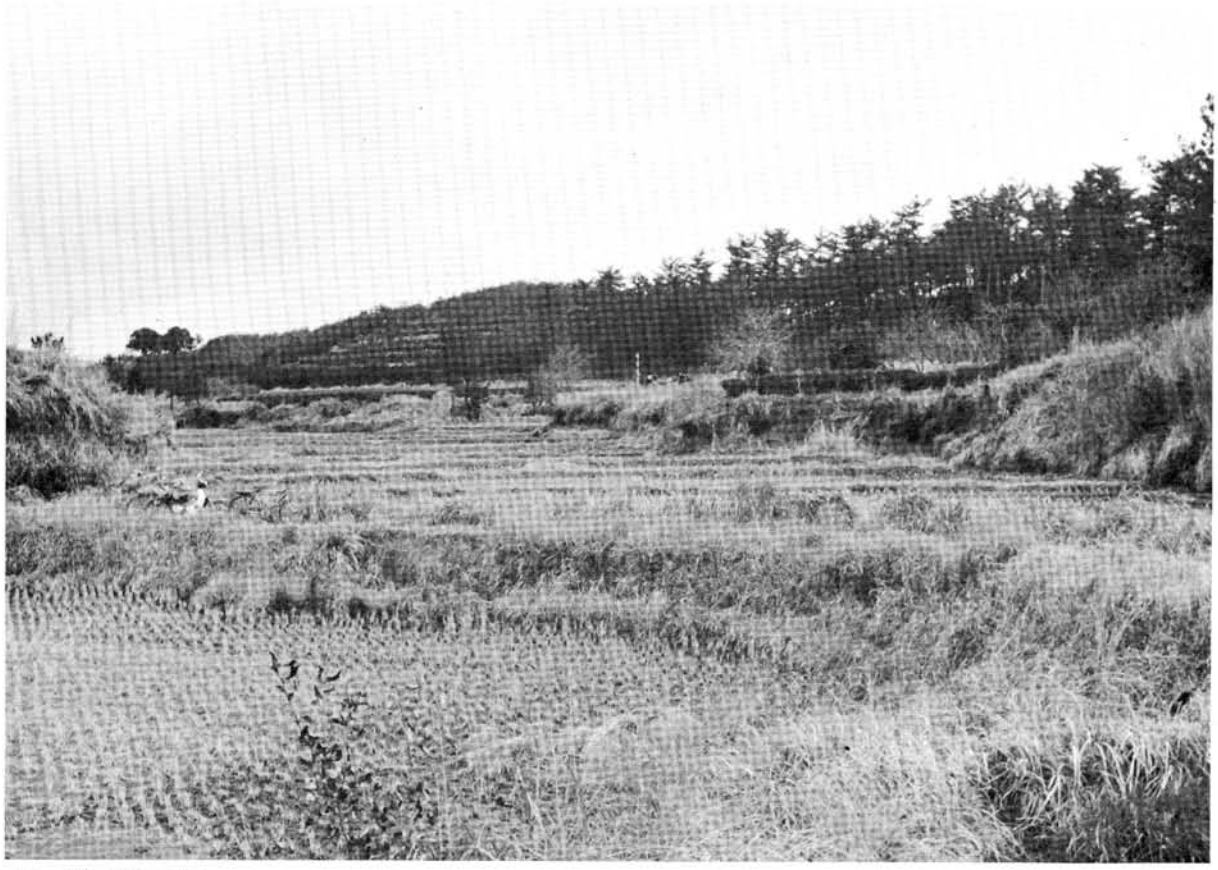
平栄遺跡地形図 (1：300) 0 −20.03 m



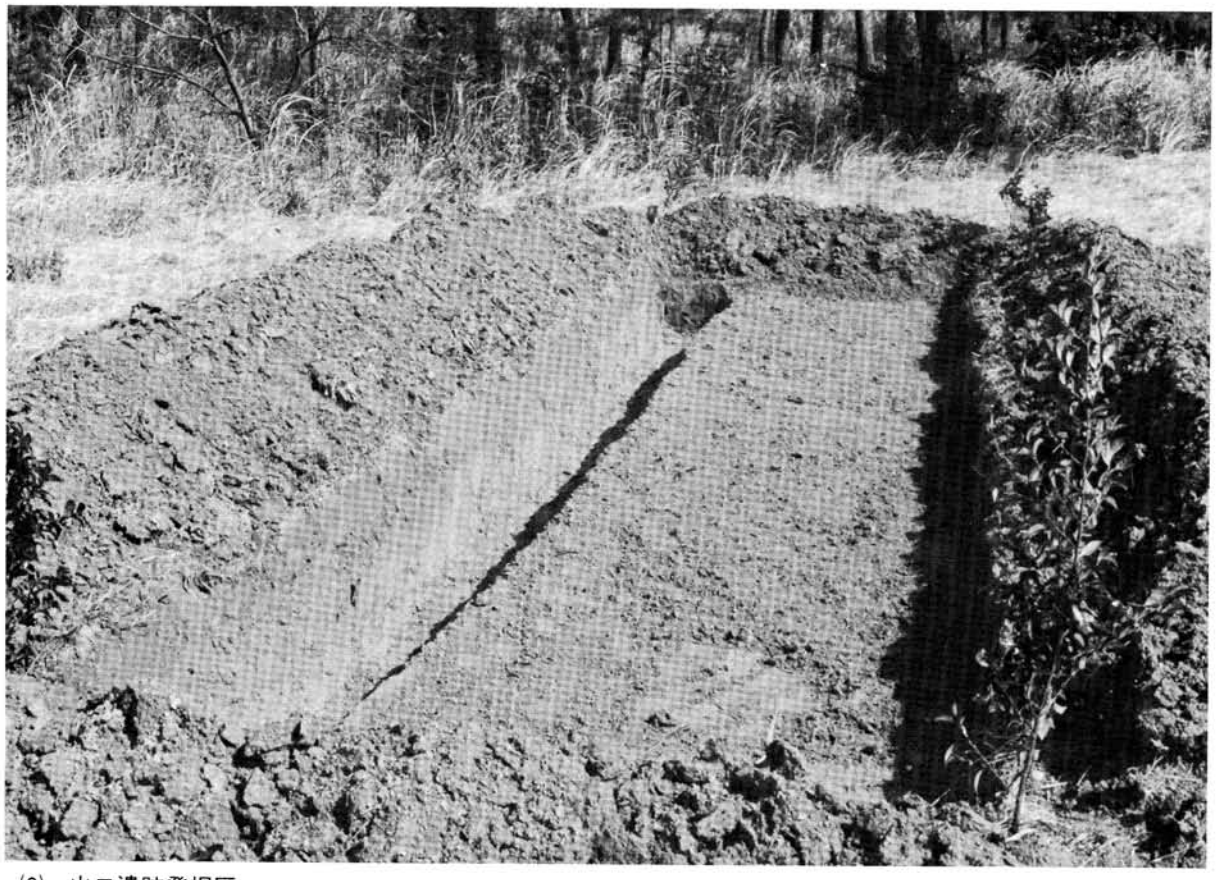
平栄遺跡 SB 3・4・5 実測図 (1：80)



大ヶ瀬・平栄遺跡出土土器実測図



(1) 山口遺跡遠景



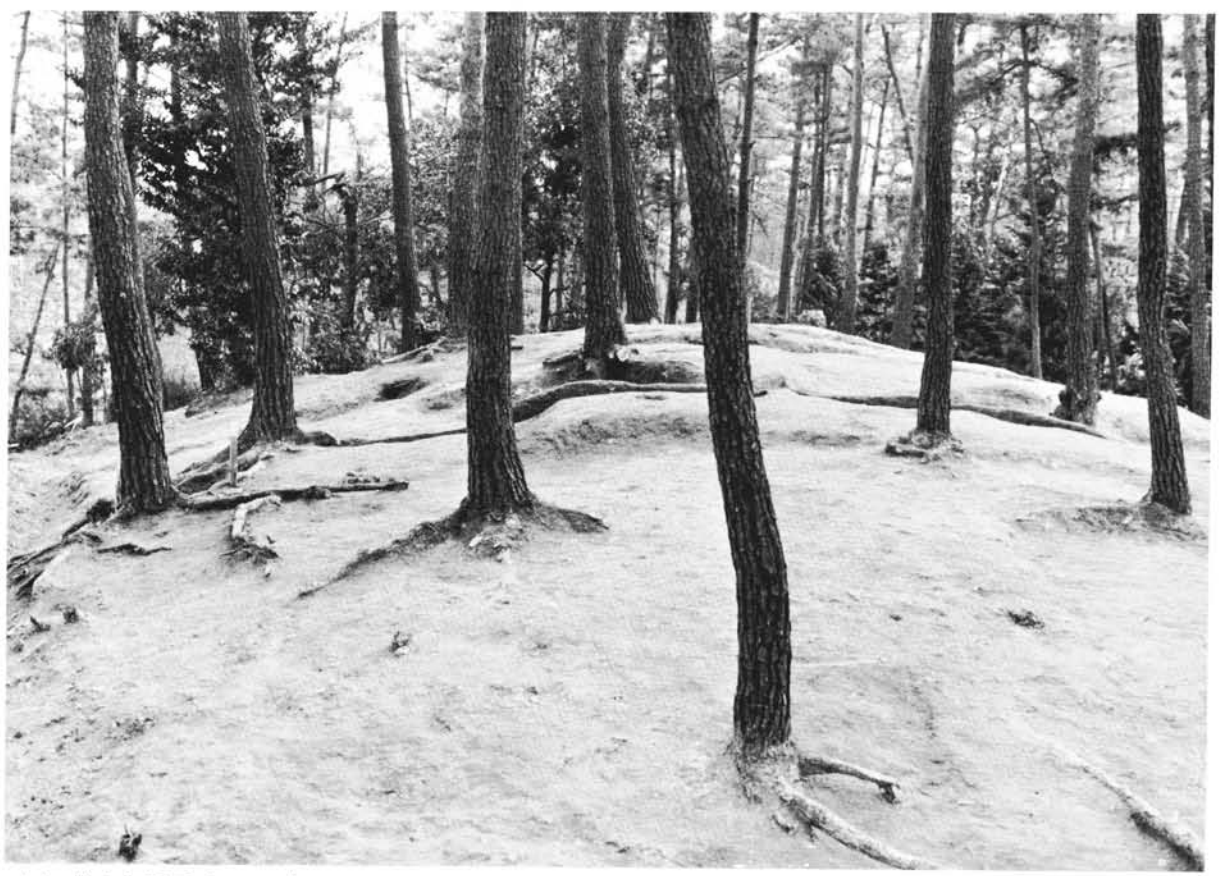
(2) 山口遺跡発掘区

(1) 遺跡遠景（東南から）

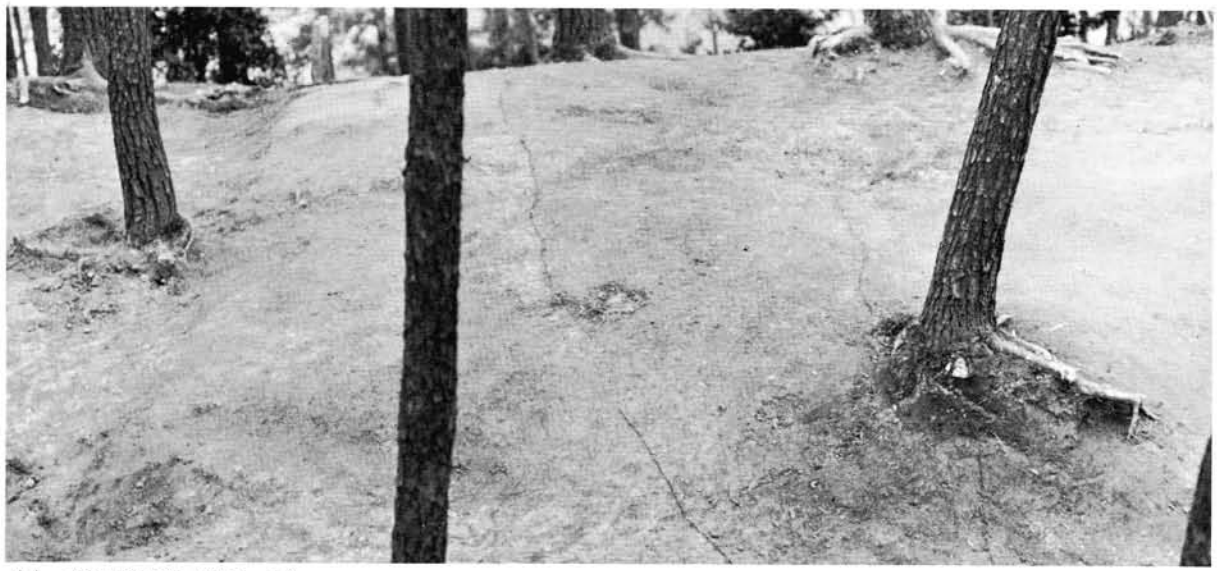
(2) 遺跡遠景（東北から）

(3) 大ヶ瀬遺跡調査前近景（北から）

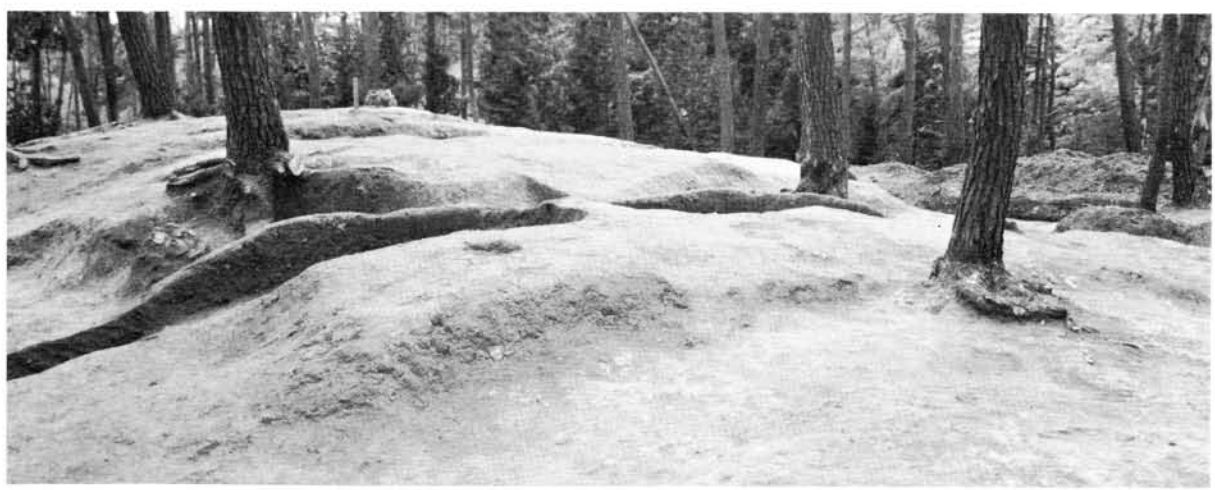
(1) 大ヶ瀬遺跡全景（北から）



(2) 前方部近景（北から）



(1) 前方部周溝（西から）



(2) 前方部近景（北東から）

(3) 前方部ＳＫ５内土器（東から）

(1) 後方部西側ＳＫ３内土器（北西から）

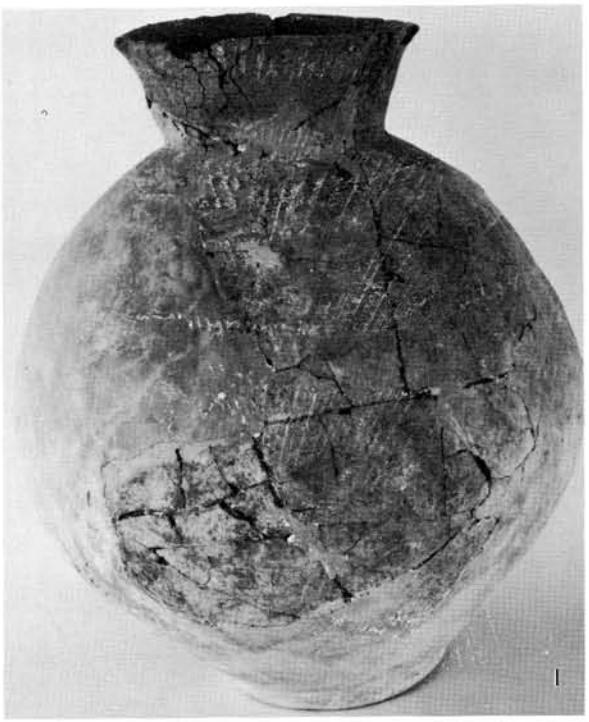
(2) 後方部西側ＳＫ３内土器（南西から）

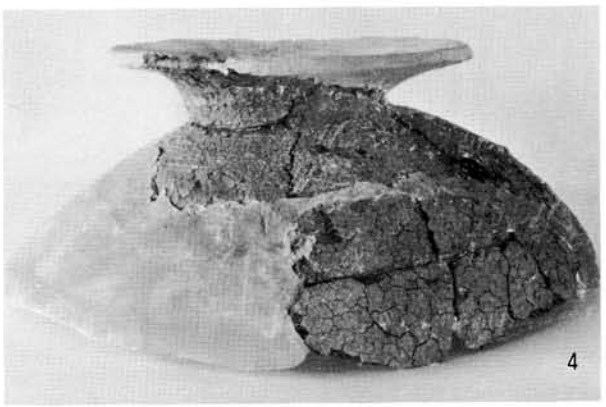
(1) 平栄遺跡調査前全景（西から）

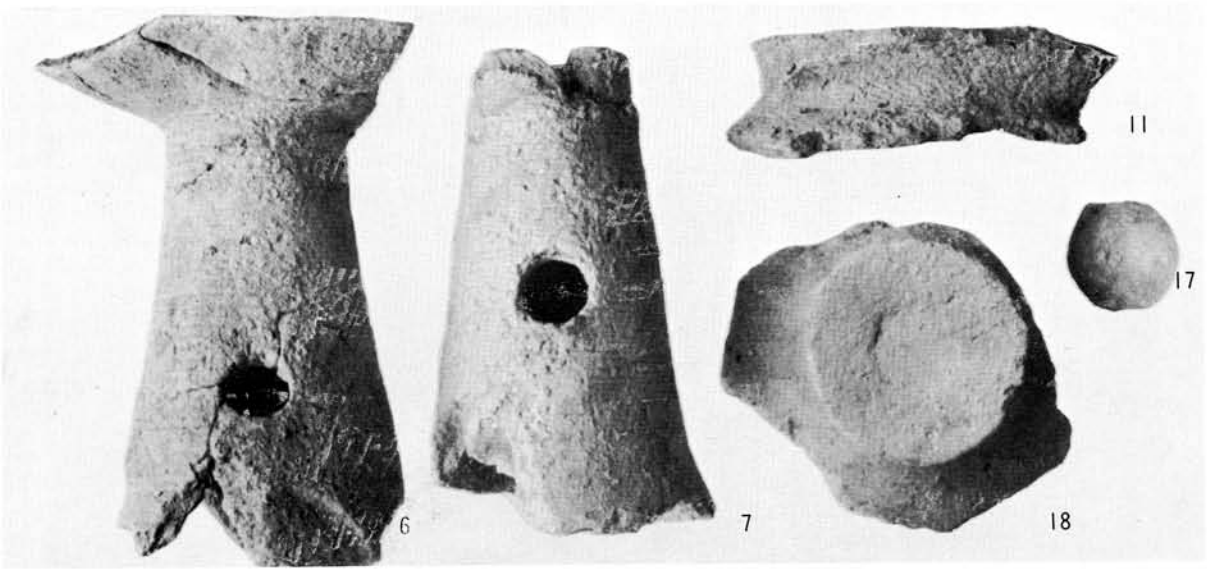
(2) 調査前近景（北西から）

(1) ＳＢ４・５（東から）

(2) ＳＢ３（東から）







大ヶ瀬遺跡出土遺物　3・5（SK5）、2・1（SK3）、4（SK4）—1：3
平栄遺跡出土遺物　6・11・17・18（SB3）、7（SB5）—1：2

昭和48（1973）年３月に刊行されたものをもとに
平成16（2004）年10月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告　19

近畿自動車道
埋蔵文化財調査報告Ⅰ

1973年３月31日

編　集　　日本道路公団名古屋支社
発　行　　三重県教育委員会

印　刷　　東亜印刷有限会社